

グローバル・ネクストリーダーズフォーラム  
2013年本会議 東京大会

報告書

平成25年10月

グローバル・ネクストリーダーズフォーラム学生本部

グローバル・ネクストリーダーズフォーラム 2013年本会議 東京大会  
報告書

目次

1. ご挨拶 .....	p.2
2. 設立趣意 .....	p.3
3. 開催概要 .....	p.5
4. 運営体制 .....	p.7
5. 開催スケジュール .....	p.8
6. 参加国・大学一覧 .....	p.10
7. セッション要約 .....	p.11
研修 .....	p.13
セッション1 .....	p.14
セッション2 .....	p.17
セッション3 .....	p.20
セッション4 .....	p.24
シンポジウム1 .....	p.27
シンポジウム2 .....	p.31
発表 .....	p.34
8. 観光・交流 .....	p.37
9. 参加者感想 .....	p.40
10. 運営フィードバック .....	p.41
11. 会計報告 .....	p.46
12. メディア掲載 .....	p.47
13. ご連絡先 .....	p.48

## 1. ご挨拶

平素よりグローバル・ネクストリーダーズフォーラム（以下 GNLF）に多大なるご支援とご協力を賜り、誠にありがとうございます。皆様のご支援・ご協力のもと、GNLF は無事 2013 年度本会議の全日程を終了することができました。

GNLF は初代会頭森下裕介の声掛けのもと 2010 年にその産声を上げ、将来リーダーとなり得る各国の学生たちがリーダーへと成長する場を提供し、将来的に参加者が各国の官界・政界・財界など様々な分野のリーダーとなった時に彼らがお互いに協働・協力しながら、一面では良好な国家間の関係を構築し、また一面では国際的な課題へ対処していく存在となっていくことを目指すという理念を掲げて活動してきました。2011 年に第一回の本会議を開催し、2012 年には初の海外開催として、チュニジアで第二回本会議を成功させました。私自身運営として初めての参加であった第二回本会議の成功に向けてチュニジア委員会と同じ目標に向かって努力した日々が、懐かしく思い出されます。

第三回の会議を成功裏に日本で開催するべく結成された GNLF2013 を会頭として率いるにあたり、私は幾つかの目標を設定しました。すなわち、これまでのノウハウを形にして体制を整え、人と人・団体と団体の繋がりを深め、新たなプロジェクトに挑戦する、という三点に集約されるものです。第一点に関しては、社団法人化・アラムナイ機構の整備・各部局タスクのマニュアル化などに積極的に取り組み、一応の完成に近づきつつあります。第二点と第三点に関しては、個人協賛制度の充実とともに特筆すべき試みとして、民間外交推進協会様との共催でシリーズ討論イベント「日本の位置を再考する」を始動し、他学生団体を束ねつつ実りある、継続的な学生と国際関係の現場で働く社会人との意見交換の場を提供する役割を担い始めたことが挙げられます。その他にも今年度は、日本経済団体連合会・日本貿易会等の主催で行われた公開シンポジウム「産学官連携によるグローバル人材育成」へ GNLF から代表を派遣し、あるいは国際平和デー（ピースデー）の実現に尽力する英国映画監督の日本初講演を主催するなど、幾つかの発展が見られました。今後も、ご支援下さる様々な団体・個人の皆様と学生の視点から協働させて頂くことを国内における目標の重要な一つとして位置づけてまいります。

言うまでもなく本年の活動のうち最大のものであった本会議においても、協賛者・講演者の皆様、講師の先生方を始め、多くの方々のご協力を得て成功裏にプログラムを終了することが出来ました。改めて深く感謝申し上げます。

本会議の具体的な内容は報告書の記述に譲りますので、報告書の中で私たちが何を考え、何を学んできたかを感じ取っていただければ幸いです。

GNLF2013 は報告会を以ってその役割を終え、私自身は今年で会頭を退きますが、GNLF は理念の達成に向け今後ますます進化してゆきます。これからどうぞ皆様の温かいご指導とご支援をいただけますよう心よりお願い申し上げます。

平成 25 年 10 月

2013 年度会頭

向山直佑（東京大学 3 年）

## 2. 設立趣意

社会のフラット化が進展するグローバリゼーションにおいて、文化や習慣、宗教などの「差異」は強みになる一方で、これまでになく人々の間に摩擦を引き起こしています。差異を前提に、互いを理解し尊重する。それこそグローバル社会において最も重要な原則であり、また多様性を増す国内社会においても必要な姿勢ではないでしょうか。また、冷戦の崩壊とグローバリゼーションの進展で、あらゆる国家が他国との関係を抜きに存在し得ない時代が到来し、良好な外交関係を可能な限り多くの国との間に築くことの重要性は、いかなる国にとっても増しています。

私たちは、「国と国との関係も、人と人との関係から始まる」という信条のもと、多様性を増す国際社会において互いを理解し尊重する姿勢を持ち、自国を代表して諸外国と良好な関係を築く役割を果たすことのできる人間こそ、これからの日本に、そして世界各国に必要なのではないかと、そしてそのような人間こそ 21 世紀にふさわしい「グローバル・リーダー」なのではないかと考えるに至りました。

グローバル・リーダーは単にスキルを持った人間のことを指すではありません。差異を前提に互いを理解し尊重する態度や、急激な環境変化の中で柔軟に問題に対処する姿勢といった人格を含む、人間性そのもののことです。

ですからグローバル・リーダーを一朝一夕に形成することはできません。それは長期的な人間関係や人格形成・学習プロセスを通じて形成される人間性だからです。そこで私たちは、将来の世界を担う可能性と意思を持つ大学生が一堂に会する国際会議を「起点」として、数年～数十年の長きにわたりプログラムへ関与することを通じて一人ひとりがグローバル・リーダーへと自律的に成長できるような場を、そして彼らが人間的な絆を深めてゆくことのできるような場を創造することを決意しました。

私たちがそのような場の創造に取り組むに際して基軸としたのは、「一対一ではなく多国間のプロジェクトであること」「一会議で終わらない長期的なプロジェクトであること」「これまでにない国家間関係を積極的に構築するプロジェクトであること」という3つのコンセプトです。

プロジェクトを多国間で行うことは多様性を体感する上で不可欠であり、前述の通りその長期性も欠かすことができません。加えて、これまでの外交的枠組みが徐々に通用しなくなる中で、従来は比較的疎遠だった、あるいは一方的であった国家間関係を、相互の理解と信頼に基づいた対等で双方向的な関係に進化させることの必要性から、新たな関係を積極的に構築する意義は大きいのではないかと考えました。

それでは日本人が、そして日本が、この国際的なプラットフォームを主導する意義とは何でしょうか。

我が国では国際的プレゼンスの低下が問題となり、日本の将来について悲観的な声が蔓延しています。日本人は「外交下手」とも「内向き」とも評されます。さらに、東日本大震災で露呈したのは「世界に対して、必要な情報を正確に発信する力」「世界の言論と行動をリードし、よりよい国際社会を構築して行くリーダーシップ」の不足でした。各界において国を背負い国際的に活躍できるグローバル・リーダーの育成が、最も急務になっている国こそ日本だと言えるでしょう。そのような意味でこのプロジェクトを日本人自身が推し進める意義は大きいはずです。

しかしそれだけではありません。日本は世界に先駆けて第二次世界大戦後の高度成長を成し遂げた国であり、また世界に先駆けて金融危機や超高齢化を経験している「課題先進国」なのです。日本が直面してきた、そして直面している課題の多くはこれから世界が直面する課題です。そこで日本の知見や経験を大いに生かすべきではないでしょうか。そのような意味でこの「日本発のプラットフォーム」は日本にとっても、世界各国にとっても大きな意義があるものだといえるのです。

私たちはこの長期的な場において、各国を代表して参加する人々に対し「経験」「知見」「人的ネットワーク」を提供し、一人ひとりが自律的に成長できる環境の整備に尽力します。そして世界各国で求められているグローバル・リーダー育成の一端を担い、将来的にリーダー達の水平な世界的ネットワークを築き、ひいては多様な国々同士の良好な関係に結実することを目指します。

2010年7月1日

グローバル・ネクストリーダーズフォーラム  
ファウンダー 森下 裕介（東京大学教養学部2年(当時)）

（2013年1月1日 一部改訂）

### 3. 開催概要

会議名： グローバル・ネクストリーダーズフォーラム 2013年本会議東京大会

主催団体： グローバル・ネクストリーダーズフォーラム学生本部（学生団体）  
本部 東京都文京区本郷 4-1-6 アトラスビル 6 階 IBIC 本郷内

会期： 2013（平成 25）年8月22日～29日（8日間）

会場及び宿泊地：

独立行政法人 国立青少年教育振興機構 所管

国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区代々木神園町 3-1）

※本報告書においては以降オリンピックセンターと省略させていただきます。

及び

公益財団法人 大学セミナーハウス 所管

八王子セミナーハウス（東京都八王子市下柚木 1987-1）

参加国（五十音）：

インド／エジプト／キルギス／スイス／チュニジア／日本(ホスト国)／ブラジル／ブルガ  
リア／南アフリカ

参加人数：

日本学生 26 名（本部運営委員 15 名を含む）

各国学生 2 名 各国教員 1 名 ※ホスト国である日本の学生は除く

合計 50名

議題：

「理想のエリートをデザインせよ」

【協力】

読売新聞東京本社

株式会社ショブウェブ

【助成】

独立行政法人国際交流基金

公益財団法人双日国際交流財団

【協賛】

三菱商事株式会社

住友商事株式会社

三井物産株式会社

豊田通商株式会社

株式会社グロービス

【後援】

外務省

株式会社ローソン

国際協力機構（JICA）

在日インド大使館

在日キルギス共和国大使館

在日チュニジア共和国大使館

駐日エジプト・アラブ共和国大使館文化・教育・科学局

駐日ブラジル大使館

日本公文教育研究会

【特別後援】

一般社団法人日本貿易会

民間外交推進協会(FEC)

#### 4. 運営体制

顧問教授： 遠藤貢（東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻教授）

会頭： 向山直佑（東京大学法学部 3 年）

事務局長： 安東慶太（東京大学教養学部 3 年）

戦略局長： 安井真（東京大学法学部 3 年）

パートナーシップ局：伊東裕章（東京大学工学部 3 年）＊局長  
小平真未（東京大学教養学部 3 年）  
市原拓也（東京大学教養学部 2 年）  
波多野昂也（東京大学教養学部 2 年）  
森山剛志（東京大学教養学部 2 年）

メンバーシップ局： 杉原真帆（東京大学法学部 3 年）＊局長  
渡丸慶（東京大学教養学部 2 年）  
吉越文（東京大学教養学部 2 年）

プログラム局： 高橋遼平（東京大学教養学部 2 年）＊局長  
蒲池晃子（東京大学工学部 3 年）  
濱口祐理子（東京大学教養学部 2 年）  
宮田佳歩（東京大学教養学部 2 年）



## 5. 開催スケジュール

### ◆Day1 (2013/8/22 Thu.)

各国参加者、順次到着

- 17:00 成田空港出発
- 18:30 八王子セミナーハウス着
- 19:00-21:00 開会式・懇親会
- 21:00- 自由時間

### ◆Day2 (2013/8/23 Fri.)

- 07:00 起床
- 07:30-08:30 朝食
- 09:00-12:30 セッション①「教育と格差」
- 12:40-13:40 昼食
- 14:00-17:00 研修
- 17:40-18:40 夕食
- 19:00-21:30 カルチャーパーティー
- 21:30- 自由時間

### ◆Day3 (2013/8/24 Sat.)

- 07:00 起床
- 07:30-08:30 朝食
- 09:00 八王子セミナーハウス発
- 09:00-11:10 高德院へ移動
- 11:10-12:00 高德院見学
- 12:10-13:00 昼食（鎌倉観光会館味亭にて）
- 13:00-13:20 鶴岡八幡宮へ移動
- 13:20-15:10 鶴岡八幡宮見学
- 15:10-17:10 自由時間（小町通りで買い物または砂浜へ）
- 17:20-18:30 夕食（八倉若宮大路店にて）
- 18:30-20:30 オリンピックセンターへ移動
- 20:30 オリンピックセンター着
- 20:30- 自由時間

### ◆Day4 (2013/8/25 Sun.)

- 07:00 起床
- 07:30-08:30 朝食

- 09:00-12:00 セッション②「世界史教育と歴史認識」
- 12:10-13:10 昼食
- 14:00-17:00 シンポジウム①「海外教員によるプレゼンテーション」
- 19:00-21:00 レセプションパーティー
- 21:00- 自由時間

◆Day5 (2013/8/26 Mon.)

- 07:00 起床
- 07:30-08:30 朝食
- 09:00-12:00 セッション③「エリートの社会的責任」
- 12:10-13:10 昼食
- 13:30-21:00 半日観光
- 21:00- 自由時間

◆Day6 (2013/8/27 Tue.)

- 07:00 起床
- 07:30-08:30 朝食
- 09:00-12:00 セッション④「人材流出」
- 12:00-14:00 移動、昼食
- 14:00-17:00 シンポジウム②「映画“The Day After Peace”上映会&ジェレミー・ギリ講演会&トークセッション」（東京大学駒場キャンパスにて）
- 18:30-19:30 夕食
- 19:00-22:00 プレゼン打ち合わせ

◆Day7 (2013/8/28 Wed.)

- 07:00 起床
- 07:30-08:30 朝食
- 09:00-12:00 発表
- 12:10-13:10 昼食
- 13:10-17:00 自由時間
- 18:00-21:00 閉会式
- 21:00- 自由時間

◆Day8 (2013/8/29 Thu.)

- 05:30 起床
- 06:30 成田空港へ出発（バスの中で朝食）

各国参加者、順次帰国

## 6. 参加国・大学一覧

インド：聖ザビエル大学（St. Xavier's College）

エジプト：カイロ大学（Cairo University）

キルギス：キルギス国立大学（Kyrgyz National University）

スイス：ジュネーヴ大学（University of Geneva）

チュニジア：スース大学（ISSATS）

ブラジル：サンパウロ大学（University of São Paulo）

ブルガリア：ソフィア大学（Sofia University）

南アフリカ：プレトリア大学（University of Pretoria）

（各大学より学生 2 名、教員 1 名）

日本人参加者 11 名（国際教養大学、東京大学、早稲田大学）

本部運営委員 15 名（東京大学）

## 7. セッション要約

GNLF 2013年本会議東京大会 議題

「理想のエリートをデザインせよ。」

### <議題設定理由>

GNLF は「将来リーダーとなりうる学生がグローバル・リーダーへと成長できる場を提供し、その後彼らが互いの協力のもとで、良好な国家間の関係を構築し国際的な課題へ対処することを目指す団体である」ことを理念としています。この理念の背景には、グローバル化が進む中、各国において時代に対応した「独自の」「正統な」リーダー・エリート層の育成が不可欠であり急務である、との問題意識があります。特に昨年度の会議において、新興国が成長する中で、途上国型のトップダウン政治から脱し理想的なガバナンスを実現するまでの動きを主導する、広い視野を持った開明的なエリートを育成する必要性が認識されたことで、それはより強いものとなりました。この問題意識は国際的・国内的 2 つの側面から説明できます。

まず国際的に見てみれば、現在多くの新興国がエリートの育成に出遅れているために人材不足に苦しみ、それが国際競争力の不足にも繋がっているといわれています。エリート育成の核となる高等教育を世界的なレベルで俯瞰してみると、世界のトップ大学は米英を中心とするヨーロッパ諸国に集中し、また各国のトップ層がこれらの大学に留学することが極めて多いという事実があります。このような状況では「その他」の国からの人材流出が止まりませんが、それは人材を送り出している国側からしてみれば言うまでもなく痛手であり、言うなれば、高等教育において、一部の「中心」とその他の「周辺」という構造が存在しているのが現状です。それを受けて多くの国家は対外競争力の向上に向けて、人材育成に力を尽くしています。

次に国内的に見れば、近年各国において「エリート」のあり方が再考され、一部ではエリートの存在自体が批判の対象になっています。例えば日本では以前から官僚批判が根強く、エリートという言葉自体にも大きな拒否反応があります。一方多くの途上国ではそもそもエリートと言われる人々が世襲的な既得権益層と化していることも稀ではありません。こうした中、「真のエリート」のような曖昧な表現の下何らかの新たなエリート像が模索されています。

そこで 2013 年度の本会議では、「教育」という一般的大テーマに包含する形で、これら 2 つの問題を議論します。

すなわち第一は「高等教育」であり、ここでは先に述べたような教育力=経済力という枠組みをいかにして打破し、各国がいかにして優秀な人材を自国内で育成するかを議論します。これは学生という現在の立場を鑑みても非常に有意義なことであり、また参加者個人

が国としての利益と自らのキャリアについて新しい視点で深く検討するきっかけになるものと確信しております。

そして第二は「エリートの正統性と責任」です。現況、試験や選抜によって一見その正統性が担保されているようでありながらその実門戸が全ての国民に開かれているとは言えない点で「不平等」な現実に依拠した存在であり、国家の中心に立つ公的存在であるエリートは、国家を主導する資格を有するのか、そして彼らはいかにして正統性を獲得できるのか、また彼らは自己の利益を超越した社会的責任を負っているのか、などの点を集中的に議論します。現にエリートであり、かつ将来のリーダーとなるべき GNLF の参加者が自らの社会における立ち位置について再考し、異なる意見を戦わせるに最適なテーマ設定となっております。

以上の二つのトピックに関する講義・議論を通して、最終的に「理想のエリートの姿とはいかなるものか」という問いへの我々なりの答えを導き出し、参加者自身の将来に向けての道標、あるいは 2013 年本会議における参加者の結論としたいと考えております。

# Training Session (Ice Breaker)

## -My Ideal Leader-

文責 宮田佳歩

### 1. 目的

私たちの団体名にも含まれ、日頃よく耳にする「リーダー」という言葉について、概念的ではなく実際の身近な存在として捉えなおそうという目的のプログラムである。身近で具体的なリーダーについて分析して共通点・相違点を共有することで、リーダーに必要な素質を帰納的に導き出し、自らの生活に役立ててもらおうと考えた。

また、このプログラムが行われたのは会議2日目ということで、アイスブレイク的な役割も持たせることも目的の一つとした。

### 2. テーマと形式

「自国にまつわる理想的リーダー」をテーマとし、20～21世紀に生きた各国にまつわる人物を事前に調査し、5～6人のグループ内で発表してもらった。その後ディスカッションにうつり、後述の4点について話し合ってもらった。

### 3. 責任者統括

研修の時間を設けたのは今回が初めてで、短い時間の中でリーダーシップ研修を行うためのコンテンツを考えるのに苦労したが、想像以上に参加者がリーダーについて考え活発に議論していたように思われる。以下に議事録を簡単にまとめる。

#### ①各リーダーの共通点

- ・過去にとらわれず目下の課題に真っ向から

根気強く取り組む。

- ・明白なビジョンを持ち、それを大衆にうまく伝え、説得し、やる気づけるためのコミュニケーション力を持つ。

- ・人々から尊敬され愛されている。

#### ②相違点を生んだ要因

提示された人物は政治家、スポーツ選手、作家など多様だった。リーダーの素質としては共通するものが多かったが、どういう分野や身分の人が有名であるかは国民性や歴史によって異なるという意見が多かった。

#### ③フォロワーの人気・信頼を集めるにはどうすべきか

誠実さ、自分の行動に自信を持つ、印象的な演説をする、すべての人が理解できるように可能な限り物事をシンプルに、わかりやすいビジョンを提示する

#### ④どうすれば「リーダー」になれるか、今の自分に欠けている要素は何か

意外にも自分に自信がないという参加者が多く、その原因としてまだまだ経験・知識が不足していると述べていた。リーダーは「なろう」と思ってなれるものではなく、気付いたら「なっていた」というものであるから、自分の不足を補う努力は必要だが最終的には成り行きに任せるしかないという意見もあった。

ほとんどの参加者が、今後の自分の在り方に生かしていきたいと答えてくれた。

# Session 1

## -Education Gap-

文責 濱口祐理子

### 1. 概要

一般にエリートと称される存在は高水準の教育を受けていることを前提とされている。そして彼らは、彼ら自身がエリートであるがゆえ、そのような教育を享受できることが当然であるというような錯覚に陥ってしまう。しかし現実には、国内における教育格差が各国において問題視されており、エリートはそのような不平等を内包した正統性の上に立っている不安定な存在であるのだ。そこで、本セッションにおける目的として以下の2つを設定した。まず、教育格差に対する問題意識を高め、かつ格差についてどのような認識を持っているのかを自覚する。その上で、格差と自身のエリートとしての正統性を関連付け、なぜ自分はエリートと呼ばれる存在であるのかという問いかけに向き合う。

以上のような問題意識に基づき、本セッションは2部構成で行った。

#### 第1部 レクチャー

「国内における教育格差の概観」

#### 第2部 グループディスカッション

- (1) 「格差是正政策に対する評価」
- (2) 「エリートに正統性を付与する要素とは」

なお本セッションでは、東京大学大学院教育学研究科准教授であり、比較教育学や国際教育開発論を専門にされている、北村友人先生に講師を担当して頂いた。

### 2. レクチャー

まず講義の始めに”equality”と”equity”

という二つのキーワードが提示された。”equality”という各々の違いを考慮しない形式的平等と、”equity”という違いを考慮した上で結果の平等を意識した実質的平等について述べることで、それらを格差、また、それに対する対応策を考える上での基軸とした。

キーワードの提示後、教育社会学に基づいた社会制度、格差構造の分析が示された。

メリトクラシーとはその者の持っている能力によってその地位が決まる社会を指し、それが理想的に機能するには、全ての人々に平等な機会が与えられている必要がある。しかし、学校よりも家庭環境やその他学校外での要素の方が子どもの将来的成果においてより大きな影響を及ぼしているという報告があるように、実際の社会状況は平等な機会が与えられているとはいいがたく、格差助長を促すものとなってしまっているのが現実である。



支配階級に属し学力の高い親を持つ子どもは、幼少期からアカデミックな文化の中で素養を磨かれることで学校システムにおいて優位的立場に立つことができ、結果的に社会に出てからも親と同様高い社会的地位を得る。

このような格差構造を文化的再生産と呼ぶ。

ペアレントクラシーとは親、家庭環境が子どもの将来を決定づけてしまう社会を指す。

ペアレントクラシーの弊害の実例として挙げられたケニアでは、初等教育が無料化された結果、多くの有料の私立学校が建設され、富裕層の親は質の高い設備と教員を備えた私立学校に子どもを通わせたため、彼らと私立学校に通う経済的余裕の無い子どもとの間に大きな格差が生まれてしまうこととなった。

最後に、格差是正のための取り組みとして、アメリカのカリフォルニア州におけるアファーマティブアクションの事例が紹介された。1960年代、カリフォルニア州では人種ごとに大学の入学枠を定めるクォータ制が導入された結果、アジア系や白人は入学が難しくなり、反対にヒスパニックや黒人の学生は入学の際に優遇されるようになった。しかし、当初から制度に批判的であったアジア系・白人のみならず、優遇される立場であるはずのヒスパニック・黒人の多くも本当に才能を持ち努力をした者も成功の理由を優遇制度によるものであると受け取られてしまうことを嫌い、最終的に制度は廃止された。この事例には、アファーマティブアクションを有効に機能させることの難しさが示されている。

セッションのまとめとしては、これまでの教育における「機会の平等」とは別の「結果の平等」という考えに再び触れ、国によって目指すべき方向性は違うものの、税制・福利厚生を厚くすることなどによって結果の平等は達成されていくとした。さらに、会議全体を貫くテーマであるエリートにも言及し、エリートはこのグローバル化した先行きの見えない世界で、人々と社会に進むべき方向を示

し、導いて行かなければならないとして講義を終えた。

### 3. グループディスカッション

グループディスカッションは、5、6人から成る5つの班に分かれて各トピックについて話し合った後、各班の代表者が話し合いの内容を全員の前で発表し、それに対するほかの班からの質問や意見があれば、それらに基づいて全体での議論へ発展させていくという形を取った。

1つ目の「格差是正政策に対する評価」をテーマとする議論では、特定の人々を優遇することは①全ての教育機関で認められる②国公立教育機関では認められないが私学であれば認められる③いかなる教育機関でも認められない④その他（国公立か私立かという基準で考えるべき問題ではない、優遇の程度による、など）の4つの選択肢を示し、どの選択肢が適当だと思うかを理由と共に議論してもらった。

様々な要素を考慮しなければならない複雑な課題であるため、多くの班が選択肢④を選ぶという結果になったが、具体的には、優遇政策という手段は社会的公平性の観点から種々の問題があるため、このような手段を取らなくてもよいように初等教育段階から全ての子どもに充実した教育の機会を保障することが重要である（入学者選抜における優遇政策は主に高等教育を対象としている）という意見や、政策に賛同出来る部分もあるが、宗教教育を一部の国民のみを考慮の対象として制度化すべきではないという意見があった。また、民族・人種を基準とすることが間違っており、社会経済的条件に基づき対応を判断



すべきだとの声もあった。



2つ目の「エリートに正統性を付与する要素とは」をテーマとする議論では、まず導入部として自らがエリートと呼ばれる、または将来呼ばれるようになるであろう立場にある理由は何かを話し合ってもらった後、ブミブトラ政策との関連を持たせるため架空のマレーシア人をモデルとして提示し、その中でエリートとしての正統性があると言えるのは誰であるかを本題として議論してもらった。

まず導入部に関しては、経済的状況、努力、才能、運などが挙げられたが、多くの者が経済的に恵まれていたことが理由として大きいと考えており、講義の内容とも一致する結果となった。

本題については、どの班でも親の地位や財力など先天的に得た要素が強く働いている人物には正統性が認められないという意見が出ていた。また、先天的に他人より優位に立っているからといってそれがただちにエリートの正統性を失わせてしまうのではなく（そのように考えることは逆差別的だとの指摘もあった）、あくまで本人の努力が成功の理由として大きいのであれば正統性は認められる、メリトクラシーが正常に機能しているならばその人物はエリートと呼ばれるに値するとの主張が注目を集めていた。しかしそれに対して

は、本人の努力でさえ文化的再生産の構造の中では純粹に本人だけに還元できるものではないのではないかという問題提起がなされ、時間の制約上結論を出すことは出来なかったもののこれに関する議論が紛糾した。

最後に講師と参加国の教授からのコメントをいただいた。全てをここに記すことは出来ないが、なぜ自分たちがここにいるのか、自分が選ばれたものであるという事実とその理由を各々が省察し、何が出来るのかを考え行動しなければならないという力強い言葉は参加者の胸に強く響いたようである。

#### 4. 責任者統括

セッションの目的が十分に果たされたかという点、改善の余地が多く残されていたことは否めない。参加者からは、議論の時間の短さや議論の前提となる情報の不足を指摘された。しかし、セッション終了後、講義を通して今まで自らが格差構造の内部にありながら認識していなかった様々な問題や学説を新たに学び、異なるバックグラウンドを持った同年代の学生たちと白熱した議論をしたことは大変有意義な経験だったと多くの参加者が口にしていった。

教育との関わりは学生の身分でなくなっただけから続く。社会に出てからこそ学歴というものの意味を知らされ、自らの立場と格差渦巻く社会との関連を考えずにはいられないかもしれないし、子どもを持つことになれば教育とあらためて真剣に向き合うことになるだろう。このセッションでの経験、およびそれに端を発するさらなる思索・議論がそうした将来の場面で役に立つことがあれば幸いである。

## Session 2

### -History of the World and the Understanding of History-

文責 高橋遼平

#### 1. 概要

歴史認識にまつわる国家間の軋轢は、日中間の南京大虐殺の認識問題など例を挙げればキリがない。これは、自国で学んでいる歴史教育を絶対的に捉えてしまっていることに起因する部分が少なくない。このセッションは、自らの歴史認識を他国からの参加者のそれとの差異にさらすことで、歴史を学ぶあり方を再考することを目的とした。議論の円滑化のために、世界的に画一化された世界史と各国ごとに制定した世界史の二項対立を軸にセッションを進行した。

本セッションは以下の四部から構成された。

第1部 各国参加者によるプレゼンテーション

第2部 グループディスカッション

第3部 全体ディスカッション

第4部 ショートレクチャー

なお本セッションでは、東京大学国際本部長でありであり、比較歴史を専門にされている、羽田正先生に講師を担当して頂いた。また、第二部のグループディスカッションにおいてはファシリテーターとして東京大学大学院の内田様、小澤様、片倉様、佐治様にファシリテーターを担当して頂いた。

#### 2. 各国参加者によるプレゼンテーション

第一部では、事前に参加者に課した課題についてのプレゼンテーションを行ってもらった。テーマは「各国でどのような世界史教育

がなされているか」である。第一部の目的は先述の通り、自分が今まで学んできた歴史教育の相対性を、身を以て認識することにあった。下手にテーマを狭めると各国における差異を削いでしまうと考えたためあえて抽象的なテーマ設定を行い、参加者に裁量の幅を持たせた。

結論から言えば、GNLFの特色でもある多様なバックグラウンドを持つ国々から集まった学生によるプレゼンはそれぞれの国の事情を反映している一方、核となる部分の認識は共通していたように思われる。日本では、世界史と言うと四大文明に始まり網羅的・系統的に教えられるのが当然とされているが、ブラジルなどでは、世界の一体化やフランス革命など世界史に対して重要な役割を果たしたと思われる出来事を選択的に教えている。また、インドや南アフリカのような多民族国家は世界史教育よりも国内の一体感を生むために自国史に重きを置いているが、同じ多民族国家でもスイスでは、スイス史というものを教えられるのは大学に入ってからだという。これは政府の歴史教育への意図の存在という共通の要素として捉えることが出来る。この他に、西洋中心的な世界史構成への批判的な声も共通して挙げられた。

各国のプレゼンテーションを通して、自国における歴史教育の特殊性を認識するのみならず、歴史教育における問題点を共有することが出来た。

### 3. グループディスカッション

第二部のグループディスカッションでは、各国で世界史がどのように教えられているのかについて、第一部のプレゼンテーションを踏まえ、二つのグループに分かれて「世界共通の世界史、または各国独自の世界史のどちらがよいか」という二項対立を軸に議論を行った。議論の出発点として各グループに二つの対立項のメリット・デメリットを挙げてもらった。前者のメリットとして、各国が共通の歴史認識を持つことが出来るので、現在日本と近隣諸国において見られるような歴史認識における衝突が少なくなることなどが挙げられる一方、各国の世界史の中で歴史的・地理的に関係が深かった国の占める割合が相対的に減り、結果として近隣諸国への理解が浅くなってしまうことがデメリットとして挙げられた。また、共通の世界史制定への合意がなされるまでの段階で多くの衝突が引き起こされるのではないかという懸念も見られた。後者のメリットとして、自国が世界史においてどのような役割を担ってきたのかがより分かりやすくなることが挙げられた。他方デメリットとしては、各国の異なる歴史認識によって、摩擦を引き起こしてしまうことが挙げられた。

グループディスカッションでは、各自が積極的に発言し合い議論も白熱し、休憩時間に食い込んでまで議論するグループも見られた。

### 4. 全体ディスカッション

第三部では、まず始めに第二部のグループディスカッションで各グループどのようなことを話したかを全体に発表し、そこから更に深めたいトピックの端緒を探る、という形を

とった。

この部において出た意見の中で特に強調されたことは、①個人が歴史教育への批判の眼差しを持つことの重要性、②生徒が歴史について論じあえる学校教育の重要性、であった。

「国によって異なる歴史教育」と「世界共通の歴史教育」という極端な二項対立の設定から始まったこのセッションだが、概して国によって異なる歴史教育の価値を認める声が大きかったと思う。それは一つには、「各国で教えられる世界史の内容（濃淡や幅）は、各国の個性の観点からも異なっていることに意味がある」といった前者の絶対的な価値を認めるものであったが、一方で、「世界共通の世界史というのは望ましいかもしれないが、その実現方法や教えられるべき正しい歴史の定義にも多く疑問が残る以上、異なる世界史が林立する中で個人が批判的な目を持つことの方に意味があるのでは」という相対的なものでもあった。

個人が歴史を分析し批判する目を養えるような具体的学校教育の在り方については論じるに至らなかったが、そのような教育の場の導入は物事を見る目に個人的なバイアスがあまりかかっていない比較的幼い段階でなされるべきだ、という意見は多くの賛同を得た。また学校教育と並行して、家庭において語られる経験に基づいた歴史伝達の重要性も指摘され、これはアパルトヘイトに関する記憶を親から伝え聞いた南アフリカの参加者から強く唱えられた。これに関連して印象的だったのは、身内などから伝え聞いた歴史というのは印象に強く残り教育の場では捨象されがちな内容をカバーするという点で意味がある一

方、個人の志向が多分に含まれ客観的に歴史をとらえることを難しくするのではないかという意見に対し、「では歴史における客観性とは何か」という問いが出たことである。これは最初の二項対立の「世界共通の歴史教育」の設定（歴史に対する中立的視点の設定）の難しさにも通じるものがあり、歴史という人工物の性質上、明確な線引きをすることはほぼ不可能であるように思われる。

そういった面も含めて考えるとき、幅広い歴史知識に基づき、幼いころからそれらを分析する能力を養っていくことの意義が、より一層明らかになってくるのだと言えるだろう。



## 5. ショートレクチャー

最後にセッション全体のまとめとして羽田先生がショートレクチャーをしてくださいました。歴史の三要素-Research, Education, Entertainment-をテーマに、これら全ての要素が政治と密接にかかわっていることが初めに述べられた。この点に関しては、学生から強い同意が得られたようだ。そして、歴史理解の多様なレベルを示し、グローバルというレベルに歴史理解の枠組みを押し上げる考えが示されたが、ディスカッションの二項対立として議論が多く交わされたポイントであるゆえ難色を示す生徒も少なからず見られた。

そして最後に、生徒の問題意識と同様、西洋中心の世界史に問題の目を向けて、次世代のリーダーとしてこの枠組みで十分だと思うか、という疑問が投げかけられてショートレクチャーは幕を閉じた。

## 6. 責任者統括

今年のセッションを作るに当たって、今までのセッション構成を白紙にして考える、というものが念頭にあった。今までのレクチャーやディスカッションの形にこだわらないようにしてみる、という試みであり、その結果として私たちのセッションは価値観の交流に重きを置いたディスカッションメインとなった。

実際にセッションを終えてみた感想としては、ディスカッションの時間がまだ十分に取れなかった、というものだった。やはりテーマがテーマなだけに参加者も熱中して議論に取り組んでくれたようである。また、内容に関しても広汎なテーマを設定してしまったために一部消化不良な部分も見られてしまった。来年以降は限られた時間の中でセッションをどう収束させていくかが課題となりそうである。しかし、参加者の歴史教育に対する認識に一石を投じることが出来たことを思えば本セッションもひとまずの成功を収めたと言えるかもしれない。

最後に、本セッションの事前準備の段階で多大なアドバイスを下さった羽田先生、そして当日のスムーズなディスカッションのためのファシリテーターとしてご協力くださったTAの皆様方にこの場を借りてお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

## Session 3

### -Social Responsibility of the Elite-

文責 宮田佳歩

#### 1. 概要

自らがエリートであることを再認識してその責任を自覚するとともに、大衆との関係性を見つめ直すことを目的とする。

参加者のほぼ全員が自国では「エリート」とみなされていると考えられるが、果たしてその自覚はあるのだろうか。特に日本人の場合、「謙遜」と称して自身のエリートとしての能力・責任を認めたがらない傾向が少なからずあるように思われる。自覚なしには責任感も生じ得ないが、逆に社会的責任を再確認することで自覚も高まるという「自覚⇄責任」の関係があるため、双方の向上によって相乗効果を図れるようなセッションにすることを目指した。

しかし一方で、エリートとしての特殊性を過剰意識して大衆との関係性を疎かにするようでは、被先導者の支持・民意は得られず「リーダー」たり得ない。最終的には、その両者のバランスを取れるような方法を模索してもらおう、というのがこのセッションの目的であった。

セッションの構成は以下の通りである。

第1部 レクチャー（講師：斎藤元一氏）

「エリートを欠いた日本の政治」

第2部 小グループディスカッション

「自国のエリートと日本のエリートの共通点・相違点」

- (1) 自国にエリートは存在するか。
- (2) 自国でエリートは何を行っているか。
- (3) 自国では「最良かつ最も聡明な者」が政治

的リーダーになっているか。

- (4) 日本は国際社会において、どのような役割を果たすことが期待されているか。

第3部 ワールドカフェディスカッション

「今後のエリートの在り方に影響を与えうる、現代特有の要因について」

- (1) グローバル化 (2) 多極化 (3) 環境問題
- (4) 宗教 (5) 多極化

なお本セッションでは、元国土舘大学教授であり、政治学を専門にされていた、斎藤元一氏に講師を担当して頂いた。



#### 2. レクチャー

講義の初めに、そもそもエリートに必要な素質として“Outstanding Ability（際立った能力）”“Volunteer Spirit for Society（社会への奉仕精神）”“Noblesse Oblige（高身分に伴う責任遂行義務）”の3つが挙げられた。斎藤氏は3つ目の“Noblesse Oblige”に注目し、近代日本の政治エリートには特にこの要素が欠けていると述べた。

Noblesse Oblige はフランス語を語源とし、200 年ほど前から貴族のあるべき姿として唱えられたものである。「高貴な身分には責任



が伴う、身分維持のためには時に自己犠牲も厭わない」という精神を表し、この遂行によって貴族は民衆から尊敬され、その地位を維持していた。ところが日本の政治を振り返ってみると、特権の甘い果実を享受するのみであり、それが無責任な社会を生みだしているというのがこのレクチャーの趣旨である。

昔から日本は「経済一流、政治三流」と揶揄されてきた。過去 20 年のうちに 15 人もの総理大臣がいるというのは海外参加者の何人かにとっても驚きだったようだが、この「失われた 20 年」を生みだしてしまった原因は何なのか。斎藤氏は「世襲制度」が原因のひとつではないかと指摘した。歌舞伎や皇族など日本伝統文化にも世襲制度が根ざしており必ずしも悪いものであるとは言えないが、政治の場合は腐敗につながる。国民の投票率が年々低下しており、日本の政治は国民の信頼・関心をほとんど失ってしまった。「失われた 20 年」で“the Best and Brightest（最良かつ最も聡明な者）”は首相リストから消えてしまったかのようだと述べた。

政治だけでなく、相撲や野球などスポーツ界においても近年不祥事が相次いでいる。結局「エリート不在社会」は「無責任社会」を生みだしてしまったのだ、という結論でレクチャーは締めくくられた。

### 3. 小グループディスカッション

講師から提示された論点について 5～6 人で話し合った。

(1) 自国にエリートは存在するか。

参加者 8 割以上が自国にエリートがいると答えた。政治、経済、学問など、あらゆる分野にその分野独自のエリートが存在している

と示した者がいた一方で、エリートという言葉は必ずしも良い意味を表さず、ネガティブなイメージを与えることが多いという意見も見られた。

(2) 自国でエリートは何を行っているか。

エリートは国の発展に大きく貢献しており、人々の生活を改善するための重要な決断を下し、行動を起こしている。彼らの職業としては、官僚や政治家、医者、大企業の社長を初めとして、芸術家やスポーツ選手など、あらゆる分野にその存在を見出せるとした者もあった。

(3) 自国では「最良かつ最も聡明な者」が政治的リーダーになっているか。

必ずしもそのようなケースばかりではないという意見が多い。その一例としてブラジルの学生は、ブラジルのルーラ元大統領が高校を修了せずして、この数十年で国民に最も人気のある大統領であったことを示した。



(4) 日本は国際社会において、どのような役割を果たすことが期待されているか。

① 海外参加者から

- ・傑出した先進国の一つとして、後進国が国際社会における水準を高める手助け。
- ・アジアのリーダーとして各国を牽引。

- ・国際紛争解決への着手。

#### ②日本人参加者から

- ・政治面においても理想の民主政治のモデルを他国に示す。
- ・他国との調和を計ることを得意とする独自のソフトパワーを生かして、国家間の調和を計る役割。

### 4. ワールドカフェディスカッション

ワールドカフェとは討論形式のひとつであり、1995年に提唱された。異なるトピックについて話し合う4〜6つほどのテーブルを設け、参加者は自分の好きなトピックを選ぶことができる。20分ごとにテーブルを移動し、新たなメンバーで新たなトピックについて話し合う。カフェのようなリラックスした雰囲気の中で、好きなテーマについていろんな人と話し合えるというのがこの形式の良いところで、参加者にも好評であった。

#### (1) グローバル化

選定理由…移動も情報収集も容易になり、エリートにできること・求められることも増えているのではないかと。ボーダーレス化したことで、国籍に縛られないエリートの新たな在り方・受け入れられ方も存在するのではないだろうか。

- ・他国と関係を持つことが容易になる。
- ・多種多様な人から尊敬されるような、よきモデルとしてのエリート。
- ・エリートが率先して国際的ネットワーク構築に努めるべき。
- ・自身が多言語を操れるだけでなく、その普及に努めなければならない。一方で、独自の言語・文化を保ちアイデンティティを失わせ

ないようにする。

- ・文化や歴史の理解。ソフトパワー。こうしたものを利用して外交する必要があるが、この場合長期展望が必要。辛抱強く交渉を続ける必要性。

#### (2) 多極化

選定理由…冷戦下と異なり、現代ではスーパーパワーは消滅したと言ってよい。発展途上国も経済的に大きな存在となるなど、ほとんどの国が他国と互いに影響しあっている。先進国、発展途上国、それぞれエリートの在り方は異なってくるのだろうか。

##### ①先進国、新興国

- ・日本はアメリカに依存、服従している。
- ・不安定性。地域的問題解決の必要性あり。
- ・自国の決断を迫られる。エリートは視野を広げ、全ての国のことを知るべき。

##### ②発展途上国

- ・多極化を支持しているが、いまだ依存から抜け出せていない。
- ・どうやって脱依存を図るかは、結局一極化・二極化の時代と大差ない。周囲の国と協力し、国際会議等で主張できるようにする。



#### (3) 環境問題

選定理由…人類種そのものの存続に関わる、地球規模で解決に取り組むべき大きな問題。

多様な国の利害関係をうまく調整できる問題解決能力など、エリートに必要とされる素質が今後増えてくるのではないか。

- 環境問題は経済と人材に関わっている。科学的調査を進めるのはもちろんのこと、様々な面からアプローチすべき。
- エリートは国際的な科学組織をつくるべき。情報や技術の公開、共有が必要。

#### (4) 宗教

選定理由…イスラム過激派のテロリズムや対テロ戦争が大きな問題となっている。宗派間の対立・紛争もいまだ絶えない。現代型エリートの責任として、多様な宗教を認めながらもその調和を図っていくことが必要ではないか。

- 宗教教育はエリートの在り方に影響する。
- 政治的権力掌握のために宗教が用いられることもある。権力に左右されないようにすべき。
- 宗教は人権と類義。
- イスラムは目には見えない「象徴」に敬意を払うという存在。エリートはそのことに気を付けるべきである。

#### (5) 情報化

選定理由…人々が様々な情報にアクセスでき、意見交換を行えるようになったことは、現代における大きな変化だと考えられる。情報技術が発達して、エリートが情報を独占していた時代は終わった。情報の自由化により、民衆とエリートの関係は今後変化していくのではないか。

- IT ギャップ。情報技術が発達している国と

そうでない国、もしくは技術がありながらも使いこなせない国との格差は問題。

- 情報教育を整備し、国内でも国際的にもデジタルデバイド解消に努めるべき。
- 政府だけでなく民間も、安価で良質な情報教育を提供できる。需要は大きい。
- 政治の透明性。政治的成果を詳細に記録。
- 知識や経験の共有が可能。

### 5. 責任者総括

このセッションを作るに当たり、まずは「エリートとリーダーは同義なのか」という問から始まった。その言葉の定義は今でも議論的となることが多いものの、実際に文献にあたってみると難解で理論的な情報しか得られず苦労した。

もともとは過去から現在に至るまでのエリート像の変遷を見る予定だったが、準備や時間の都合上、現代にしか焦点を当てることができなかったのが悔やまれる。「エリートの社会的責任」という広いテーマを扱うため、レクチャーとディスカッションテーマは多少かけ離れたものになってしまったことも賛否両論であるが、個人的には時間と内容のバランスが取れていたのではないかと思う。

ワールドカフェ形式は今回初めて取り入れてみたため、説明や事前準備に苦労したが、参加者の活発な議論によって充実したものになったと自負している。参加者からも好評であったので、来年以降も導入を検討したい。

最後に、講師を引き受けてくださった斎藤元一様、積極的に参加してくれた参加者のみなさんにこの場を借りてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。



## Session 4

### -Rethinking Disparities and Student Mobility in Higher Education-

文責 蒲池晃子

#### 1. セッション概要

現在、人材流出などの問題がたびたび叫ばれているが、その根底にある原因は先進欧米諸国と発展途上国の中での大学間格差が広がっていることである。大学間格差は国力と深く関係しており、根本的解決には時間がかかる。ではこの格差を是正するために今世界ではどのような対策がなされており、今後どのような対応がとられるべきなのか。そこでこのセッションでは大学間格差が実際に存在しているという正しい現実の認識を持ってもらい、その問題に対して将来的にリーダーになっていく自分たちはどのようにこの問題に取り組みばいいのか、まだ今までどのようなリーダーシップがこの問題の解決に発揮されてきたのか、を理解することを目的とする。

本セッションの構成をまとめると以下の通りである。

##### 第1部 レクチャー1

「世界の大学教育の現状」

##### ミニディスカッション1

「自国の大学教育について」

##### 第2部 レクチャー2

「学生の流動性について」

##### ディスカッション2

「学生の流動は国家にとって有益なのか」

##### 第3部 レクチャー3

「大学教育の質向上のために世界でとられている対策」

##### ディスカッション3

「大学教育質向上のために国家がとるべき政

策とは」

なお本セッションでは、国立教育政策研究所の総括研究官である深堀聡子氏に講師を担当して頂いた。



#### 2. レクチャー

レクチャー1の初めに、さまざまな機関の大学ランキングは何を指標としているのかを示し、それらの指標に基づいたランキングでは上位がほとんど欧米諸国の大学に占められていると述べた。

また、各国の大学への入学者数の増減や大学にかかる国家予算の比率などのデータを通して世界的に大学入学者の数が増加傾向にあること、教育への国家投資は国家の規模や予算によってまちまちであることを示した。

さらにここでは各国参加者が自国教育の他国教育との対比を行ってもらうためにデータを用いて日本の高等教育機関の現状や問題点を以下のように挙げた。

- 日本の義務教育の期間について
- 大学以外の教育機関が減少している中で大学の数が増加していること

- 少子化によって子供の母数が減少しているにも関わらず大学入学者数が増加傾向にあること
- 大学の予算のほとんどが入学者の授業であること
- 大学の増加によって授業方法や大学の目的が多様化し、質の低い大学が増加していること

続いてレクチャー2では学生や学者の人材流出が本当に問題であるのかについて学生に考えてもらうために人材流出に対する新しい視点を二つ示した。

- 人材流出は流出元の国に残っている学生のモチベーションを高めることにつながるのではないか
- 人材流出は一時的なもので、長期的な観点でみれば流出流入などではなく人材の循環なのではないか、そしてこの循環は国境を越えた知識人たちのネットワークを作り上げるなど様々な面で役立っているのではないか

最後のレクチャー3では『チューニング』というプロジェクトについて説明した。チューニングプロジェクトとは複数の大学間の教科やコースにおいて到達目標やコース終了後に得られる成果などを共有することで単位の交換などを容易にし、学生の大学間循環を活性化しようとするプロジェクトである。このプロジェクトを通して発展途上国などの大学教育の質を向上させること、各国の国内教育の活性化を目指している。チューニングプロジェクトは今ヨーロッパやアフリカ、アメリカ、ロシアなど世界各国で行われている。

### 3. ディスカッション

グループワークでは各国の教育状況を比べてもらうため、5～6人のグループ内で10分程度自国の教育制度について簡単に紹介してもらった。これは自国の教育について他国のものと比べるために行ったもので特にまとめなどは行っていない。

ディスカッションでは講師から提示された論点について5～6人で話し合ってもらい、それぞれの意見をまとめたものを全体の前で各グループに発表してもらった。発表のあとに全体での意見交換会の場として時間をとり、交わった海外教員の方々には質問やコメントをしていただいた。

ディスカッション1は「学生の流動は発展途上国の発展を促進していくものなのか弱めるものなのか」「高等教育機関は自己充足可能なシステムになりうるのか、それとも国が学生の流動(留学)を推奨していくべきなのか？」という二つの議題に沿って話し合いを行ってもらった。



一つ目の質問に関してはエリート層の発展の促進を促すのみで全体としての発展にはつながらないという意見が多く出た。また二つ目の質問に関しても国が留学を推奨していく必要があるが、その推奨は決して富裕層に留まらず、優秀な学生を派遣すべきものでなければならないという意見が多く出た。

ディスカッション2では大学教育の質を向上させるための政策についての案を 15 分程度議論してもらった。

全ての班がチューニングプロジェクトを促進させることという結論にいたっていたが、その中でも認知度の向上や適用地域の拡大など改善点が述べられた。

#### 4. セッション責任者総括

はじめ我々のセッション班で議題を話し合ったときには人材流出を問題視し、その根本的原因だと考えられる大学間格差の存在の認識を目的としたセッションにしようという案にまとめていた。しかし講師である深堀聡子氏から高等教育分野での最新の取り組み、「チューニングプロジェクトを通して人材循環を活性化させること」についての話を伺ったあと、このセッションをただ大学間格差の認識をするためだけのものにするのは惜しいと考え、より踏み込んだセッションに変更した。



専門的なセッションになりすぎて参加者たちがうまくディスカッションを行えなかったり、講義中の講師と学生たちの活発な議論ができなかったりするのではないかと不安を感じていたが、当日は時間が足りなくなるほど白熱したものとなった。休憩の時間をカットしたり、最後の方が駆け足になったりしたのが心残りだが、全体的にスムーズに進んだのではないと思う。全体的な構成としては時間が足りなくてすべての質問を話し合えていない班もいたため、ディスカッションの時間をもう少し長くとってもよかったかもしれない。また、当日最も意外だったのは海外教授からの反応である。私は海外教授の方々の役割として生徒たちのアドバイザーのようなものを想定していたのだが、生徒たちと同様にセッションに活発に参加され、セッションが終わった後もしばらく講師の方に質問をされていた。今回のセッションを通して学んだ反省は次年度以降の本会議に活用していきたい。

最後に、準備からセッション当日までご協力いただいた深堀聡子氏、一緒にセッションの準備をしてきたセッション班のメンバー、当日セッションを形あるものにしてくれた参加者や海外教授の方々、その他いろいろ助言や応援をしてくださった方々に感謝の意を表して責任者総括とさせていただきます。

# Symposium 1

## - Screening & Special Talk Session with Jeremy Gilley-

文責：向山直佑

### 1. 概要

今回の本会議では新たな試みとして、一般公開のシンポジウムの開催を計画していた。当初は別内容の物を考えていたが、その話が無くなった頃に丁度、「ジェレミー・ギリという映画監督・活動家が来日し講演する場所を探している」というお話を耳にし、紹介を経て今回のイベントの開催が決定した。その後コーディネーターの根本かおる氏、黒田由貴子氏等とのミーティングを経て、最終的に以下のような形で執り行った。

・日時：8月27日 14時～17時

・タイムライン：

14:00-14:10

主催者挨拶

14:10-15:30

映画“The Day After Peace”上映会

15:30-16:30

ジェレミー・ギリ氏講演

Q&A セッション

16:30-17:00

根本氏・黒田氏による

ラップアップセッション

・参加人数：約 80 名

・場所：東京大学駒場キャンパス内

21KOMCEE レクチャーホール

・協力団体・企業

英治出版株式会社

一般社団法人 国際平和映像祭

株式会社ピープルフォーカス・コンサルテ

ィング

ユナイテッドピープル株式会社

一般社団法人 ワールドシフト・ネットワーク・ジャパン

### 2. 講演会

まず、GNLF 会頭の向山から当日の流れと GNLF の簡単な紹介を行い、映画の上映に移った。上映後、Skype にてロンドンのジェレミー・ギリ氏と会場を繋げ、根本かおる氏のコーディネートの下ギリ氏のスピーチが行われた。内容を要約すると次のようになる。

私の 13 年の活動は三段階に渡り、そのうちの二段階が映画で皆さんが観たものである。第一段階は世界の情勢に関心を持ち、アイデアを持つこと。その中で平和のための日が実質的にない事に関心を持ち、映画を作った。第二段階は活動を広げること。映画を上映し、各地で講演した。懐疑論者は沢山いて、それを悲しく思った。実際に意味を持つことを証明するために、アフガニスタンに行った。私は、シニシズムは人を殺すと思う。皮肉家に対する回答は、アフガニスタンで我々は実際成功した、ということだ。

第三段階はピースデーの恒例化・制度化であり、今、そしてこれから進んでいくことである。この世界の誰もがピースデーについて知れるようになるべきだ。そのために、Facebook や Twitter のような SNS を使って広報していきたい。今我々は、その重要なプロセスの中にいる。禁煙や飲酒運転禁止の



運動が成功したように、多くの人が参加し、働くことで結果的に平和への道筋に繋げる事ができる。

ここにいる 100 人の人たちが、色々な手段を通じて呼びかけることで、1000 人、あるいはもっと沢山の人たちが気づくことが出来る。そうした試みを通じて、人間の行動を変えられることが出来る。

沢山の個人や NGO が暴力に反対する活動に参加するようになっている。

### 3. 質疑応答

次に、参加者からの質疑応答の時間が設けられた。最初に、「ピースデーのアイデアを日本で広めるのに一番重要なことは何か」という質問が投げかけられ、それに対して彼は、手段は何でも良いが、一つには Facebook などにピースデーのことを載せるなどがあると答えた。次に、「ピースデーは大事であり、その点に関してあなたは成功したが、平和そのものを実現することには成功していないのではないか。そして平和を実現するのに必要なものは何か。」という質問があり、それに対しては「一日を平和にすることが出来なければ、平和を実現することはかなわない。また、我々は有史以来最も平和な時代に生きている。そして、人間は生来悪質だとは思わない。」という回答があった。さらに GNLF のエジプト人参加者からの最近のシリア情勢に関する質問、暴力的なゲームは根絶されるべきか、などの質問が幾つか続いた。

質疑応答の中で、人々が集まり、協力して動くことに意味があるという点を強調していた。

ギリ氏との Skype 中継は約 1 時間で予定

通り終了した。



### 4. ラップアップセッション

最後に黒田氏・根本氏のファシリテーションによるラップアップセッションに移った。このセッションでは 30 分という時間的制約から、2 つの質問を GNLF 参加者に対して投げかけ、順番に答えてもらうという形式がとられた。その質問とは、「あなたにとって平和とはなにか」「それに関してあなたは何かをしたか」というものである。

第一に対する答えとしては、概ね「正義と公正さが確保されている状態」、「抑圧のない状態、自分が自分でいられる状態」という趣旨の回答が多数を占めたが、その他に「すべての人が他の人に関心を持っている状態」というような答えもあった。第二に対する答えとしては、「正義や公正を実現できるような地位につきたい」、「すべての人が同じ力を持っているとは思えない。ゆえに、影響力を持つポジションにつきたいと思う。」、「世界を変えるには自分を変えなければならない」、「メディアが非常に重要だと考えるので、メディアに所属したい。」などの回答があった。

同セッションの終了を以ってイベントは予定通り終了し、会場全体の拍手によって締めくくられた。



なお、本講演会の全編は  
<http://www.youtube.com/playlist?list=PL7q7cahP3N5lwEUXlmaJxwJ4iKkOdqFnU>にて再生可能である。

## 5. 責任者統括

以下は本イベントに関するアンケート結果の抜粋である。

### ① ” The Day After Peace ” 上映について

- ・ 衝撃を受けた。もっと世界について考えていかなければならないと思った。
- ・ 小さな一歩も世界に影響を与えることができるということを示した素晴らしい映画だった。

### ② ジェレミー・ギリ氏講演について

- ・ 彼の情熱にふれることができ良かった。
- ・ 彼の話は非常におもしろく感銘を受けた。
- ・ ギリ氏は聞かれたことにたいして十分に答えていなかった。
- ・ Skype 音声がすこし聞き取りづらかった。

### ③ ラップアップセッションについて

- ・ 様々な国の学生の意見を聞くことができて良かった。
- ・ GNLF 参加者だけでなく、他の日本人参加

者にももっと意見を求めて欲しかった。

### ④ 講演会全体について

- ・ 本当に素晴らしいイベントだった！ありがとう！
- ・ この活動には実際に戦争地域に住む人々の考えを変える力はないと感じたが、私の意識は変わった。彼らのために私たちができることは何かを考えていこうと思った。

最後に、GNLF 参加者に対してその日の夜に配布されたアンケートの結果を付け加える。

### ① Peace One Day についてもともと知っていたか。イベント後、この活動についてどう考えるか。

- ・ 知らなかった（全員）
- ・ 素晴らしい活動である。何もなかったところから築き上げたことが信じられない。
- ・ ギリ氏は自分のことばかり話していた。この活動が役に立つとは思えない。
- ・ 彼は紛争や戦争を単純化し過ぎているのではないかと思う。
- ・ 映画にとってもインスパイアされた。平和について考える良い機会になり、良いロールモデルを得た。

### ② 公開イベントというアイデアをどう思うか。GNLF にとってどのように将来役立つだろうか。

- ・ GNLF を広めるのに役立つ。
- ・ 参加者にとって世界を変えられるような活動をする人と話すことが出来るのは良い経験だ。
- ・ このような形式は良いアイデアだ。東京大学を見ることが出来たのも良かった。

### ③講演会についての意見

- ・ギリ氏は質問に十分答えていなかった。(複数)
- ・GNLF にあまり関係がないように思う。
- ・Peace One Day は素晴らしい団体だと考える。
- ・戦争を止めるにはもっと具体的なプランが必要だ。
- ・一人の人間が努力と信念で夢を叶えることが素晴らしい。
- ・批判する声も多かったが、個人的には彼は良い活動をしていると思う。友人にも映画を薦めたい。

アンケート結果を振り返る限り、GNLF の参加者を除いた日本人参加者からは、極めて肯定的な評価が集中した一方、GNLF の参加者からは賛否両論が投げかけられ、公開イベントを開催するという形式そのものに対してはほぼ全体が肯定的であったのに対し、内容やギリ氏の態度については否定的な意見の方が多数を占めた。これは GNLF の参加者が彼や Peace One Day について事前に知らなかったのに対し、一般の日本人参加者は既に彼の活動について知っており、賛同している人が中心であったためであろう。

特に、会場の参加者が着席し姿勢を正してギリ氏の話をしている一方で本人がベッドに寝転んで登場したことが、一部の参加者には極めて失礼であると映ったようである。

以下最後に主催者としての見解を述べる。

ギリ氏が一部の質問に対して直接的に十分

な回答を与えていないという印象を与えたようだが、それは彼が自らの使命を「ピースデーを実現すること」に集中しているからであり、平和を実現することそれ自体では無いからであろう。必ずしも、それ自体は批判されるべきことではないように思う。何もしていないよりも、一日でも平和を実現するために努力している方が無論、先に進んでいるからである。いずれにせよ、彼の態度、質問への不十分な答え、活動内容等に関して批判があったならば、それはその場で表明されるべきであり、そこから本当の議論が始まるのではないだろうか。ゆえにそのような雰囲気を作れず、また十分な議論の時間を用意することが出来なかったことを、主催者として非常に遺憾に思う。

とはいえ公開イベントという形式は今後も続けていくべきものであり、今回のイベントを通じて GNLF の認知度も向上したことを、Facebook 等での反応を通して感じる。

「場を提供する」ことに存在意義を見出す GNLF は、今後も、他団体や個人と協力しつつ、次代のリーダーに対して様々な機会を提供していくことであろう。

今回のイベントは、企画・広報等あらゆる場面に於いて、GNLF と協働して下さった方々が代表を務める団体の協力なしには実現しえず、そのためこの場を借りて感謝申し上げます。

またコーディネーターを務めていただいた根本かおる氏・黒田由貴子氏には、特別の感謝を申し上げます。

## Symposium 2

### -Special Presentations by Eight Lectures/ Specialists-

文責 安東慶太

#### 1. 概要

本セッションでは今回の本会議に参加してくださった海外講師の皆様に、現在行っている研究とその分野についての説明、またその研究を行うようになったきっかけを約 15 分間プレゼンテーションしていただいた。また最後には学生たちの投票により誰が一番面白いプレゼンテーションだったかを決めてもらった。

#### 2. レクチャー

それぞれの講義の内容とともに、講師陣の簡単なプロフィールを掲載しておく。(エジプトの教員である Ms. Maha Khalil は体調不良で本セッションは欠席されたため、割愛する。)

##### 【Ms. Jamilya Biialinova】

(Full time instructor of Contemporary issues of International Relations, Economic Security, International Business, Labor Economics and Migration, Kyrgyz National University)

キルギスの政治と汚職についての講義であった。まずキルギスの政治の歴史と汚職の本質について述べ、それがどのような悪影響を及ぼしているか、それに対してどのような対策がとられているかを話した。

最後には先生自らが汚職と戦うという短いビデオが流され、会場は大いに盛り上がった。

##### 【Prof. Isabelle Collet】

(Associated Professor, Faculty of

Psychology and Science of Education, University of Geneva)

Prof. Collet はもともとコンピューターサイエンスの分野を学んでいたが、その当時はその分野において若い未婚の女性は採用されづらかった。その影響もあり、その後ジュネーブ大学に戻り、教育とジェンダーについて研究することになった。

最後に本会議のテーマである教育に言及し、教育は性別や階級、人種にとらわれずに自らの運命を切り開く重要な手段である、と述べた。

##### 【Prof. Kirmene Marzouki】

(Assistant Professor, Sousse Institute of Applied Science and Technology, University of Sousse)

Prof. Kirmene は自らの研究分野の中で、画像検索を基にした映像コンテンツと人工のニューロンネットワークについての講義を行った。現代では画像加工の技術が発達したため、画像検索によりネット上の画像を取得し、それを用いて様々なことができる。その具体例と問題点を述べた。





またニューロンネットワークがどのようなもので、それを人工的に作るには何が必要かについて話し、自分たちの研究チームで新しい人工ニューロンネットワークを開発するという夢を語った。

**【Prof. Elizabeth de Almeida Meirelles】**

(Professor of International Law and International Environmental Law, University of São Paulo)

国際環境法への三つの「inter」アプローチについての講義であった。三つの「inter」とは「interdisciplinary」「international」

「intergenerational」の三つである。環境問題に取り組むためには化学、地理学などすべての学問が協力するべきである。また地球は一つしかないということを意識し、国の壁を超えて皆が協力するべきである、そして後の世代のことを考えた、持続可能な発展を目指すことが大切なのである。

**【Prof. Venitha Pillay】**

(Associate Professor, Faculty of Education, Department of Education Management and Policy Studies, University of Pretoria)

自身が所属するプレトリア大学とそこで働くようになったきっかけ、そして現在の研究とのつながりについての講義であった。

プレトリア大学はもともと白人講師ばかりだったが、1994年の改革によって黒人の職員雇用を行うようになり、その流れで Prof. Venitha は大学に勤めることとなった。

2002年には民族別に分かれていた教育機関の統合が行われ、それによって教育の重要性を再認識した結果、教育管理という現在の

研究を行うことになった。

**【Prof. Shefali Balsari-Shah】**

(Associate Professor and Head of Department of English, St. Xavier's College)

まずインドの伝統やヒンドゥー教の教え、ゲーテの言葉を引き合いに先生というのはどういう存在であるべきかを述べた。その後、自らの研究分野である視覚文化や詩について、その内容や面白さを実際に画像や詩を解説しながら伝えた。



**【Prof. Stoycho P. Stoychev】**

(Assistant Professor, Department of Political Science, Sofia University St. Kliment Ohridski)

自らの研究分野の中でも政治の量的分析と政治リスクについて話した。前者は質ではなく量を考えることでより自らの研究内容を一般化することができるという点で重要であり、後者は政治的な決定が多く的事象に影響を及ぼす現代で、その不確実性を減らし、予測可能なものにするという点で重要である。

現在では同質と考えられていた国々の違いを反映した新しい政治リスクの概念化やヨーロッパの政治リスクの主要要因である政治腐

敗と組織的犯罪ネットワークなどを研究している。

また最後に行われた投票では Prof. Shah が一番に選ばれた。

### 3. 責任者統括

今年のプログラムは海外から来ていただいた教員の方々の立ち位置という意味では去年と大きく違ったものになった。去年はセッションの講師は全て海外教員の方々に担当していただいたが、伝達の難しさなどいくつか問題点があった。今年はその問題点を解決するためにセッションの講師は全て日本人の教員に担当してもらった。これによりセッションの一貫性や質は去年より上昇したが、海外教員の方々の招待目的が不明瞭となってしまった。しかし一流の大学の教員陣にきていただいているのだから、やはり彼らから何か学ぶ場が欲しい、ということでこのようなシンポジウムの場を設け、教員の方々に自らの専攻や研究についてプレゼンテーションしてもらうことになった。

個人的には今回の試みは成功だったのではないかと考えている。プレゼンテーションの内容は全て期待を裏切らず興味深いものであったし、また発表方法もパワーポイントの使い方など様々で独自性が出ており、話し方なども参考になる点ばかりであった。また最後の投票は場を盛り上げる、学生の聞く姿勢を保つ、などの意図で行ったものの、教員の方々

には受けが悪いのではないかと考えていたが、楽しんでもらえたようでなによりであった。

学生の感想も「教員自身や彼らの専攻について学ぶいい機会になった」「今日のすべての講義が印象的で非常に興味深かった。私がいつも大学で受けている授業がどれだけ退屈かわかった。この形式がよかったと思う。」「とてもよかった。教員の方々は皆驚くべき知識を持っている。私にとって多くの内容がとても新しいものだった。特にキルギスの歴史は非常に興味深かった。」など高評価が多かった。

一方で反省点もいくつかある。ひとつは事前に教員の方々に持ち時間がどれぐらいかをしっかりと伝えておくことができなかったことだ。当初は約 15 分間ずつを予定していたのだが、20 分を越す人も出てきてしまい、時間がかなり押してしまった。

またこのシンポジウムの内容が決定するまでに時間がかかってしまったため、教員の方々には夏休み中の一ヶ月で準備をしてもらうということになってしまい、忙しい中大変なご迷惑をおかけしてしまった。

しかしプログラム全体としては、教員の方々についてより深く知ることができたり、その専攻について学ぶことができたりと興味深いものになったのではないかと考える。最後になるが、プログラムを盛り上げる興味深いプレゼンテーションを行ってくれた 7 人の素晴らしい教員の方々に心から感謝の意を表したい。

## Presentation -Design the ideal elite-

文責 市原拓也・波多野昂也

### 1. 概要

本会議では大テーマとして「教育」を扱ったが、教育に関する四つのセッションとは別に、参加者には会議全体を通して「理想のエリートデザインせよ」という課題をこなすグループワークを課した。このグループワークの目的は、各セッションで学んだことを、一過性のものとならぬように、今後自分たちが向き合っていくべき課題と有機的に結びつけ、自分たちの中で考えを整理することである。特にセッションの内容と絡めて、上の問題に関して「どのようにしてエリートを選抜するか」「どこでエリート教育するのか」「どのような能力を持たせるべきか」「何のためにどのように働くエリートか」という四点を発表に組み込むことを求めた。各グループは自由時間を用いて上の問題について話し合い、最終日には各班 15 分の持ち時間で話し合った内容を発表するように求められた。



### 2. 発表内容

各班の発表内容をまとめると次のようなものになる。

#### 【Group A】

エリートというものは特定の分野で卓越した能力を持ち、社会に強く影響を与えるものであると定義した。

エリート教育する場としては、専門知識の基礎を身に着ける場所としての学校と、実世界での学びをするインターンなどが重要であるとし、学校、実世界両面の教育の必要性が強調された。

必要な能力としては、専門知識や知識を生かした社会への貢献、リーダーシップ、勤勉さ、それらに加えてチームワークができることがあげられた。しかし、必ずしも良い学歴は必要ではないとした。

何のために働くべきかについては、エリートはロールモデルとして人々の手本となり、また、決定権を持つ者として問題の発見や解決に力を発揮するべき存在であり、また、実利主義的な目的に固執するべきではないと述べた。

#### 【Group B】

エリートとして選ばれるには、学位やインターン経験といった知識面、言語能力や対話能力といったコミュニケーション面、また適切な決定をする力や自信を持つこと、チームプレイができること、という四つの要素が必要であると主張した。

教育に関しては、エリートは学位や学歴やその他の教育面で判断されることが多く、特別な訓練や教育を受ける必要があるが、学歴

そのものは判断基準として必ずしも必要ではないと述べた。

能力については、他人とうまく関わり、他人の才能を世の中の為に生かし、役立てられる能力が必要で、それに加えて、信念を持ち、行動に一貫性があることも必要であると述べた。

何のために働くかという点については、エリートは仲間を信頼し、尊敬し、良好な関係を取り、お互いの目標を認識したうえで、目標に強く働きかけるべきであると主張した。

結論では、何を基準に取るかでエリートであるかどうかは変わってしまうものであるが、それでも自分たちはエリートであるのだろうかという問題提起で終わった。

#### 【Group C】

特に私たちに大きな影響を与えるという点から、政治上の人物を想定し、また多国籍のグループであったことから想像上の世界においての考察を行った。

エリートとして選ばれる基準は、様々なリソースを有し、効果的に活用できること。社会が尊敬できるような倫理観を持つこと。異なる考えや問題の解決に対して柔軟であること。頼るに値すると社会に思われるように、家系ではなく、例えば学業や社会貢献の面での証明された経歴を持つこと。これらに加えて、社会の需要を把握し、それに対して働きかけ影響を与えることや、社会をよりよくするための目標を設定することであるとした。

また最初に提示した四つの問題に対しては、エリートは選ぶものではなくその人物がなしてきた結果「最終的に」そう認められるものであり、能力に関しても、エリートと認められるようになったら、基準の中で挙げたもの

が備わっているはずであると主張した。また教育は望ましいが必ずしも必要ではなく、何をしてきたかが大切であるので、教育や働き方や目的よりも、何よりもまず証明された経歴を持つべきであるとも述べた。

最後に、理想のエリートは、世界に対して良い影響を与え、変化を起こし、最高の基準を満たしている、彼ら自身の努力によってそれと認められた人々であると結論付けた。

#### 【Group D】

エリートに求められる要素として、不可欠で無いにしろ、自分を高めるための教育やインターンシップといった実地経験、グローバルネットワーク、気を紛らわすことなく目標に集中し、献身的に一生懸命働けること、を最初に挙げた。

次に、すべてのリーダーがエリートであるわけではなく、またすべてのエリートがリーダーであるわけではないと主張し、リーダーと一般的なエリートの共通点を示した。その共通点とはビジョンをもつこと、潜在的な能力があること、そして責任があることであると主張した。

しかしそれらの能力を持っていたとしても、アイデアを実行に移し、世の中に価値を付与しなければエリートとは呼べないと述べ、最終的には「潜在的な機会や実行力を持った、人々に価値を与えられる者。」としてエリートを定義づけた。

#### 【Group E】

この班は選ばれ方、教育を受ける場所、持っている能力、といったいくつかの条件を設けて、すべてを満たしている人を最初にエリートであると仮定した。

しかし多くの人はいくつかの潜在能力があ

ってもすべてを満たしていないという理由でエリートとはみなされなかった。そこでこのグループは、エリートは、すべてを満たしている必要はなく、潜在能力がある人ならば自分のなしたいことを実行することが出来、最初のエリートはその力や才能を使いそのような人々を引き上げてエリートに加えるべきだと述べた。

最終的にはエリートが潜在能力のある人に歩み寄り、手を差し伸べ、新たなエリートとして引き上げるような形が望ましいとしてブレゼンは終わった。



### 3. 海外講師からの講評

海外講師による各班へのフィードバックは、概ね好評であった。特に、グループEの自信に満ちあふれた発表は、非常に分かりやすく、「エリート」がどのようにリーダーになっていくかを描いており、理想の「エリート」の本質を表現しているということで、最も評価が高かった。しかしながら、各班が掲げる理想のエリートに必要な能力を全て兼ね備えることは不可能であり、理想の「エリート」を実在の人物を例にするなど現実的に考える必要があるという指摘がブラジル、エジプトの講師から挙がった。

以下、それぞれの海外講師によるフィードバックを簡単にまとめる。インドの講師は、まずは自分で行動すること、そしてそれによって他者を巻き込むことができることが必要であると述べた。また、アマルティア・センの“The Idea of Justice”での「フルート」を例に、公共政策の重要性を説いた。チュニジアの講師は、「エリート」「リーダー」「経営者」は、異なり、それらを区別する必要がある、「エリート」の選別方法のみならず、どのように「エリート」が継続的に社会的に高い地位にとどまり、目標を達成することができるかも今後考えていく必要があるということ述べた。また、「エリート」にとって最も重要なこととして、諸問題を自分のことにおきかえること、また他者を批評することのみならず、自分自身を客観的に批評できることを挙げていた。キルギスの講師は、「エリート」がリーダーになるには多少の運も必要であるが、高い目標・夢を持ちながら、努力し続けることの重要性に言及した。南アフリカの講師は、理想の「エリート」の明確な定義は存在しないが、自分が「エリート」であるとの自覚を持つと同時に、各班の発表で挙げた「エリート」に必要な能力のうち、自分に足りないのは何か、そして「エリート」としての自分の責任を明確に認識することの重要性を述べた。また、「エリート」にはグローバルな視野と世界をよりよいものに変えていくという気概が必要であり、大学生のうちに、GNLFのような各国の一流の大学の学生が一堂に会する会議でこうした能力を積極的に身につける必要性にも言及していた。



## 8. 観光・交流

### -Opening Ceremony-

文責 市原拓也

オープニングセレモニーは会議の参加者が初めて一堂に会しお互いのことを知り合う機会であった。セレモニーは会頭の向山からの挨拶より始まった。この挨拶の中で向山は各国の参加者に対し、この会議中で成し遂げたいこと、成し遂げてほしいことを話し、参加者一同も改めてこの会議への目的を確認していた。

また、挨拶後の立食形式での歓談タイムでは、各国の参加者、教授陣はこれから一週間共に過ごす各国の代表と挨拶を交わし、お互いの国のこと、自身のこと、またすでに目にしてきた日本文化についてなどについて話し合い、会の始めには疲れの见えていた参加者の顔にも笑顔が見られるようになった。

食事の時間を終えると、再び会頭の向山から一週間のタイムスケジュールについての説明がなされた。その後フィードバックシートや誓約書などを配り、オープニングセレモニーは終わった。

参加者からは立食形式での歓談は距離を縮めるのにとてもよかったと高評価であり、また会議についての抱負を聞くと、多くの参加者から様々な国から来る人と交流し多くの知見や視点を得たい、という声が多かった。

### -Culture Party-

文責 渡丸慶

カルチャーパーティーでは、各国の参加者が自国の文化を伝統衣装や料理によって

紹介しあい、お互いの文化を目や舌で実体験する。毎年本会議中に行われる恒例かつ一際大きな盛り上がりを見せる一時であり、日本人にとっても交流に乏しい国々が数多く参加していることもあり、非常に記憶に残る一幕となる。

今回のカルチャーパーティーでは、一ヶ国15分という時間を与えられて、その中で各国が順に伝統衣装や踊り、料理の紹介を行っていった。特に印象的であったのは、各国の伝統の踊りである。日本が参加者12人全員でソーラン節を披露したのに始まり、エジプトによるベリーダンスやブルガリアによるラチュニツァなどが披露され、その踊りにまさに聴衆の目は釘付けになった。他にも、寸劇や歌、スライド、映像などを用いて、どの国も聴衆に感動を与えていった。各国披露の後には、各参加者が持参した伝統料理を嗜みながら歓談を楽しみ、ぐっとお互いの距離を縮めることができた。

学術的な議論を通じた交流だけでなく、文化交流を通して生まれた感動から、国を超えた人と人とのつながりはより強いものになるのだなと心の底から感じる事ができた一時であった。



## - 終日観光 -

文責 吉越文

本年度の観光は日本の運営側が全面的に担当した。行き先には、日本文化を体感できる有名な観光地であり、食事や自然環境といった点でも充実している鎌倉が選ばれた。



最初に訪れたのは高徳院である。参加者は大仏の内部見学や記念撮影を楽しんだ。

釜飯の昼食を堪能した後は、鶴岡八幡宮に移動し、本宮や宝仏殿を見学した。続いて自由行動の時間があり、小町通りの散策、海で遊ぶなど、皆思い思いに過ごしていた。夕食はしらす丼だったが、参加者は見慣れない食材にも果敢に挑戦していた。

参加者から集めたアンケートによれば、時間に余裕が欲しいなどの意見は散見されたが、事前説明やツアー内容は非常に好評であった。



## - Reception Party -

文責 渡丸慶

本会議4日目の夜には、レセプションパーティーが行われた。オリンピックセンターのレセプションホールにて行われ、本会議の参加者を初めとして、本活動にご支援を頂いている方々やセッションを担当して頂いた講師の方、当団体のOB・OG、一般の学生を招待しての会となった。パーティーは、会頭の向山、設立者の森下による挨拶、続く各国の教授、来賓の方からお言葉、そして来賓者代表のチュニジア大使館書記官の方による乾杯の音頭でスタートした。

会は立食形式で行われ、各々移動しつつ食事と談笑を楽しんでいた。本会議の参加者同士が親睦を深めるだけでなく、なかなか顔を合わせる機会を持ちにくい参加者と支援者の方々が直接触れ合うことで、双方が各々感じるものがあったのではと思う。

2時間の会も瞬く間に過ぎ、最後に参加者、支援者の方々全員での写真撮影を行い、残り3日の会議の成功を祈って、会は締めくくられた。



### - 半日観光 -

文責 森山剛志

本年度の本会議では鎌倉終日観光と並んで東京半日観光も行った。ここでは参加者は4グループに分かれ、それぞれのグループで各自が事前に定めたコースを回ってもらった。日本の伝統文化を鎌倉で味わった後に、渋谷でのポップカルチャーや東京タワーから眺める高層ビル群を体験する事によって、多様な日本らしさが感じられたのではないか。



また観光の際に公共交通機関を使って移動してもらったのだが、その規則正しいダイヤに感銘を受けた参加者も多かったようだ。事前に行きたい場所についてアンケートをとったり、バスではなく公共交通機関を使っただけの移動であつたりと参加者の自主性を重んじたプログラムであり、当初は安全面での心配もあったが、皆楽しんでくれたようで日本の文化に慣れ親しむ有意義なプログラムとなったと思う。

### -Closing Ceremony-

文責 森山剛志

わずか一週間とはいえ、濃密な毎日を通じた本会議もこのクロージングセレモニーをもって終わりを迎えた。セレモニー自体は、本会議を振り返るムービーのスクリーン上映と共に和やかな雰囲気が始まった。一週間分の思い出が一気に甦るこのムービーは、非常に好評であつたようで運営冥利に尽きる。

そして、海外教授からスピーチをいただいた後に、学生参加者全員がこの本会議の思い出を語りあった。途中でキルギス語での愛の告白方法の披露などもあり明るい雰囲気の中で別れのスピーチが進んだのは非常に印象的であつた。

最後は、会頭の向山からのスピーチでセレモニー、及び会議を締め括つたのであるが、そこから印象的な言葉を一つ借用したい。

“This is not the end, but the beginning of the beautiful friendship.”

この言葉を体現できるような友情を今回の参加者が、これからも育てていければ幸いである。

先日の2020年夏季オリンピックの東京開催決定に際しては、海外参加者の方からFacebookを通してお祝いのメッセージが来た。そのような関係をこれからも築くことができるように来年以降の本会議での新たな出会いを楽しみにしつつも、これまでの参加者との密な繋がりを維持できるようにしていきたい。



## 9. 参加者感想

- ・ セッション、プレゼンテーションについて

セッションについては全体的に良く準備されていた。ディスカッションのテーマ設定についても、参加者達がそれぞれの立場からの意見を出しやすいようにという工夫が感じられとても良かった。特にプレゼンテーションに向けてのグループワークに関しては、会議全体を通して、それぞれのセッションを踏まえたうえでのエリート像を議論することができ、非常に充実したものであった。ただ、プレゼン準備のための議論が白熱し、しばしば夜遅くまで議論が長引くことが多かったため、夜以外にもプレゼン準備の時間が欲しかった。

- ・ 観光、文化交流について

日本文化や現在の東京という町を肌で感じることができ、非常に満足のいくものであった。特に、東京観光の際に行きたいところでグループにわかれ、それぞれのグループを日本人参加者が案内する取り組みはとても素晴らしいと感じた。セッションで学ぶだけでなく、このようなプログラムによって、互いの国の文化に触れ交流を深めることは、会議後の参加者同士の繋がりを保つためにも非常に重要なものであると感じた。

- ・ GNLF2013 全体について

教育における世界的な問題について、それぞれ全く違うバックグラウンドを持った参加者達と意見を交わすことができ、これらの問題についてとても関心が深まった。また、参加国の学生、教授たちと、それぞれの国の言葉、衣装、伝統、食べ物、考え方についての話をすることができたことで、国際交流において最も重要な相互理解を深めることに成功したのでないかと思う。なにより今後とも一週間の会期で、参加者達と今後も連絡を取り合っていきたいと思えるような関係を築くことができた、素晴らしいプログラムであった。

## 10. 運営フィードバック

- ① 今年度本会議における目標
- ② 総評
- ③ 課題および改善策
  - ・組織面
  - ・運営面
    - a) 課題：本会議前
    - b) 課題：本会議中
    - c) 改善策
  - ・内容面
- ④ 総括
- ⑤ 「理想のエリートをデザインせよ」に対する回答

### ① 今年度本会議における目標

GNLF2013 における目標は主に以下の 3 点であった。第一に、2 回目の本会議国内開催ということで、プログラム面の充実である。具体的には、全体プログラムの満足度向上、各セッションの質的向上、さらに、観光やその他文化交流プログラムの拡充・発展である。2011 東京大会、2012 チュニジア大会はともに初の国内・国外開催であったため、その最たる目標は「開催の成功」にあった。しかし今年度からは、その 2 回分の経験の蓄積を生かして、「より良い会議の開催」を目指すことが、組織内においても、そして組織外のサポーターの方々からも求められていた。そのため、2013 の事前準備段階においては、プログラムの確定・セッション担当講師の折衝などを早くから始め、余裕を持った準備を進めるなどしていた。またファンディングにも力を入れ、様々なチャネルを通じて支援者を探していた。

次に掲げた目標としては、会議開催中の運営の効率化である。今までは初開催ということもあって、本会議中に備品の不足やシミュレーション不足が時折あったが、今回は開催前から綿密なシミュレーションを行い、ハラル食などの混乱も起こらないように気を付けていた。

3 点目としては、GNLF ネットワークの充実があげられる。もちろん今までも組織理念に基づき、地域に縛られずに多様性を求めたネットワークを構築してきた。しかし今年度からは、より理念に沿った、より質的・量的に向上されたネットワークを構築することをめざし、既参加国以外の国からも、厳正な内部選考を経て新規参加国を招待することを試みた。

全体として、本会議のみならず、GNLF 全体としての発展を目指したのが今年度の活動

の主眼であったといえる。

## ② 総評

成果：全体的なプログラムの向上に成功したことは最も大きな進歩であるといえる。また会議中も全体としては特に大きな問題も発生せず、円滑な運営が行われた。また参加者同士の交流が活発に行われたことも重要な成果であるといえる。

課題：財務面で予算不足が発生したことが一番の課題であるといえる。また運営と参加者の間での交流が上手く行えなかったことも前年度から引き続く課題であり、この部分の改善は必要であろう。またビザの手続きや会議中の食事制限などの細かな問題も発生したため、以後はそのようなことのないよう、より徹底した準備が必要となる。

## ③ 課題と改善策

以上が今年度本会議の概括であるが、課題に関してより具体的に問題点と改善策を考える。そのうえで、組織面・運営面・内容面の3点に分けて考察する。

### 【組織面】

まず組織面に関しては、おおむね効率的な組織内運営および組織としての活動が1年間を通じて行っていたように思われる。しかし課題として、財務における赤字が発生したことは今後喫緊の課題として解決しなければならない。活動の性質上、あらゆる状況にある国から参加してもらえよう、航空券代や開催地での諸経費を相当な好条件でGNLFは提供している。ただしそのため、どうしても財務における支出が膨大な額となるので、理念に賛同して頂いた方々や、学生のこういった国際的な活動に好意を示して頂いている方々の財政的支援がどうしても必要となる。ただ、そういった外部からの支援にも限界があるのは確かであり、今年度財務に関しては赤字が発生してしまった。学生が行う非営利の活動には財務の問題はつきものであるが、GNLFの継続的なネットワークを構築・維持するためには、将来的に財務の問題をなんとしても解決しなければならない。

そこで、今年度も挑戦しようとしたクラウドファンディングや個人協賛の拡充・充実を、これからの組織発展に比例する形で展開していくことが必要となるように思われる。つまり、支援・協賛チャンネルの多角化・充実化が今後、財務の問題を解決する上では必須となる。今年度は、企業協賛に関しては例年よりもより幅広くアプローチをかけ、その射程をより幅広いものとできたのは確かである。しかしその他チャンネルに関しては、クラウドファンディングに目をつけるのが多少遅れたこと、個人協賛制度の整備が終わったのが活動中であったことなどから、チャンネルの多角化は十分に行えたとは言えない。そのため、来年度以降、より綿密な事前調査を経たうえで、今までご支援頂いてきた企業の方々や個人の方々とのつながりをより深いものにする努力を怠らないことはもちろんのこと、その他

の収入チャネルを充実させるため、他の学生団体への聞き込み、社会貢献活動のファンディング方法の調査などを行い、より幅広い射程から収入増額に関するアプローチをかけていくことが必要となると思われる。さらに付け加えれば、経費で落とす金額をできるだけ最小化できるよう、徹底した支出切り詰めも行わなければならない。

#### 【運営面】

##### a) 課題：本会議前

前述のとおり、例年と比較しても、概ね計画的・効率的な組織運営ができていたように思われる。しかし、海外参加者が日本にやってくる際のトランジットでのビザ手続きの確認を十分に行えず、会議直前に発覚して航空券を急に変更したことや、プログラム面の準備をする際に、セッション面に関してグループで分担をしたわけだが、各グループによって進捗に大きな差が出てしまったことなど、細かいところで少しずつ問題が発生したことも否めない。

##### b) 課題：本会議中

会期中に関しても、全体としては円滑な会議運営が達成できていたように思われる。しかし会期中においても、オープニングセレモニーにおいてハラル食の準備を怠っていたこと、ビデオカメラに問題があるという情報の全体共有が十分にできておらず会議中の動画撮影に混乱が生じたこと、ホテルの部屋数予約に関する混乱など、細かなところで小さな問題があったことも確かである。

##### c) 改善策

運営面における全体的な課題として、まだ細かい問題が散見されることが今後改善すべき部分であると思われる。いずれも、全体での情報共有・各担当者間での十全なやり取りの不備、当日までのシミュレーションの徹底不足などに由来するものであった。

そのため今後、よりよい会議運営を達成するためには、全体・各担当者間での情報共有の効率化および徹底、また事前のシミュレーションを何度も行いより一層の徹底を図ることが必要となる。具体的には、役割分担を Google Document で共有しておき、いつでも担当者を明確に示しておくこと、さらにそれら共有ドキュメントを頻繁に各メンバーがチェックすることを徹底させることなどが考えられる。またシミュレーションに関しては、会議よりも十分に早い段階から、今年度以上に何度も全体で綿密な打ち合わせを行うことが今後必要となるように思われる。

#### 【内容面】

内容面に関しても、例年よりもより充実したプログラム、参加者に満足してもらえるようなプログラムが提供できたのではないと思う。あえて課題を挙げるとすれば、運営と参加者の間での十分なコミュニケーションが取れず、両者の間に分断が生じてしまっていることである。これは前年度から引き続く課題であり、GNLF ネットワークを構築する上

では、どうしてもより密な交流を参加者間だけではなく、運営と参加者の間で形成する必要がある。

この課題に関しては、どうしても運営側のマインドを変えることが一番重要なのではないだろうか。すなわち、運営としての仕事をそつなくこなしつつ、より積極的に参加者と交流していくこと、一種の手際の良さ・器用さを身に着けることである。また運営側の英語力向上も1つ大きな課題であり、運営の事前選考において一定の英語基準を設けること、また本会議準備期間に頻繁に英語勉強会を開催し各メンバーの積極的な参加を義務付けること、などが考えられる。英語勉強会に関しては今年度も開いており、その一層の拡充が来年度以降の課題となる。

#### ④ 総括

今年度の活動は、間違いなくこれまでの会議の中で最も計画的で安定した運営が行えたものであったと思われる。それは前年度からの運営経験の蓄積がようやく活用できるようになったからであり、各メンバーが十分に今までの経験を生かして主体的に自らの役割を果たしていったからであろう。さらに前年度から引き継ぐ段階で組織理念も基盤をしっかりと固め、その理念に沿った形で GNLF の活動を進めていくことができたのは、非常に大きな進歩であると思われる。また、来年度のブルガリア開催も無事に決まり、隔年で日本国内・海外で本会議を開催する仕組みもうまく機能するようになってきた。内容面において、GNLF がその充実に成功していることは、今後のネットワーク・組織の発展に関して、とりあえず順調な歩みを進めているといえる。

ただ一方で、GNLF としての大きな課題も露見した。それは財務面であり、収支のバランスをとることがいかに難しいかということである。GNLF はまだ設立されて5年にも満たない若い団体であり、活動内容もいわゆるボランティア活動のように直接的に、目に見える形で社会に貢献するものではない。そのため、様々な企業や財団、個人の方々に支援をお願いするときも、なかなかアピールをしづらいという面がある。ただしその一方で、理念に基づいて選ばれた学生や教授の財政的参加ハードルを少しでも低くするため、航空券代を GNLF 側が負担するという仕組みは変えられないため、財務面での支出はどうしても大きくなってしまい、収入と支出に不均衡が生じやすい。そのため、今後の活動においては、どうやって収支のバランスを取るか、それが一番の課題となるように思われる。そのうえでももちろん支出の徹底的な切り詰めも重要であり、経費審査に関してより厳しい基準を設けることも必要となる。

しかし最も重要なことは、GNLF という組織を外部にどう発信していくかということである。先述の通り、GNLF の活動はなかなか目に見える形で公益に資することをアピールすることが難しい。それは GNLF の活動が長期的な視野に立つものであるからであり、ネットワークの形成に力を注いでいるためだ。ただ、財務の問題を解決し、GNLF の長期的

ビジョンを達成するためには、何としても外部の方々からの支援が必要となる。そこで私たち GNLF は、来年度以降の活動において、いかに GNLF という活動が長期的には社会に益するものであるのか、いかに学生レベルにおけるグローバルネットワークの構築が日本にとっても重要であるのか、そのような団体 PR の方法をより一層工夫し、充実させなければいけないように思われる。今後は、外部の方々から見てわかりやすいように団体の説明・広報をすること、つまり GNLF と社会のつながりをより強固なものにすることを目指して活動を進めていきたい。

#### ⑤ 「理想のエリートをデザインせよ」に対する回答

この問いを会議の全体的なテーマとして掲げ、最後に各参加者にグループになって答えを発表してもらった。最後に、この問いに対する GNLF としての答えを、参加者たちの答えを基に提案したいと思う。

世間の一般的な認識とは異なり、理想のエリートとなりうる人物には、高学歴は必須ではないと考えられる。しかし、教育そのものが必要でないわけではなく、学校教育における専門知識の定着や、インターンシップを通じての現場主義に基づく実地経験は確かに必要である。そして、決定力、柔軟性、チームワーク力、実行力などの能力を同時に発揮していくことで、そのような専門知識や経験をより効果的に生かすことができる。

さらに、理想のエリートは、確固たるビジョンや信念のもとに、社会のニーズを把握して一歩先を行く問題の発見や解決に努め、献身的な社会貢献をなすべきである。

日本においてエリートと言えば一般的には政治家や官僚が想定される。その中ではまず学歴が重視され、その一方で実行力や決定力、柔軟性がないと批判されている。このような現代社会においては、各班で挙げられた上記のようなエリート像が必要となるだろう。その将来のエリート達を輩出するプラットフォームとして、GNLF をより発展させていくことが重要であるように思う。GNLF の会議においては、世界各国の学生や教授との交流を通じて様々な価値観に接触・理解をすることができ、かつ、一週間の会期の中で同じプログラムや共同生活を行うことを通して、柔軟性やチームワーク力などの能力についての見識も深めることが出来る。

他方、エリートの役割としては最終的な社会貢献がもっとも重要であるが、GNLF はまだ発足したばかりの団体であるので未だこの目標の達成への道は遠い。だからこそ、運営委員、参加者それぞれが、これから成長していく団体の一員として、またこのような貴重な経験を得ている個人としても、そのような理想のエリートとしての役割を今後果たしていけるよう邁進していきたい。

\*なお、今年度の運営メンバーの所感をブログに掲載しておりますのでよろしければご覧ください。（<http://ameblo.jp/gnlf/>）

## 1.1. 会計報告

### グローバル・ネクストリーダーズフォーラム学生本部2013年度会計報告 2012年12月21日から2013年10月5日まで

科目	金額(円)	備考
I 収入の部		
1 賛助会費	¥317,000	一般賛助制度
2 助成金収入	¥1,250,000	財団等の詳細は報告書に記載
3 企業協賛収入	¥1,252,500	企業等の詳細は報告書に記載
4 参加費	¥1,932,510	海外参加者500ドル 日本人運営・参加者3万円
5 アラムナイ拠出金	¥395,500	OB・OGによる
当期収入合計 (A)	¥5,147,510	
前期繰越収支差額	¥49,445	
収入合計 (B)	¥5,196,955	
II 支出の部		
①本会議関連費		
1 各国渡航費	¥2,976,117	参加者の航空費・航空費関連手数料
2 国内交通費	¥287,140	高速料金・駐車場代 チャーターバス・電車賃
3 宿泊施設利用費	¥900,370	オリンピックセンター 八王子セミナーハウス
4 食費	¥784,900	パーティー経費含む
5 文化交流費	¥23,940	鎌倉観光
6 雑費	¥70,581	
②団体運営費	¥119,841	印刷費・ドメイン代・雑費
③報告会関連費	¥29,000	施設利用費・軽食代
当期支出合計 (C)	¥5,191,889	
当期支出差額 (A) - (C)	¥-44,379	
次期繰越収支差額 (B) - (C)	¥5,066	

## 12. メディア掲載

### 【新聞】

- ・ 読売新聞（2013年6月6日・25面）  
「夏の国際会議 参加学生募集」
- ・ 民間外交推進協会機関誌5月号（2013年5月1日・9面）  
「学生の国際会議を後援」
- ・ 読売新聞（2013年8月31日・22面）  
「エリートのあり方 討論」

### 【ウェブサイト】

- ・ 株式会社ジョブウェブ（2013年6月10日～6月30日）  
「グローバル・ネクストリーダーズフォーラム  
2013年本会議東京大会 日本国内参加学生募集」  
URL <http://www.jobweb.jp/#>  
※ 現在、掲載は行われておりません。
- ・ NEX-T-ABLE（2013年6月15日～8月29日）  
「世界の学生が一同に会し、徹底的に議論する。それがGNLF。」  
URL <http://nex.gipi.net/>  
※ 現在、掲載は行われておりません。



### 13. 連絡先

組織体制は2013年10月5日をもちまして、役員の改選等を行い2014年の組織体制に移行いたしました。

グローバル・ネクストリーダーズフォーラム

〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-6 アトラスビル 6 階 IBIC 本郷内

公式ホームページ <http://gnlf-web.p2.bindsite.jp/>

メールアドレス [gnlf2013@g-nextleaders.net](mailto:gnlf2013@g-nextleaders.net)

[報告書、2013年本会議に関するお問い合わせ]

2013事務局長 安東慶太 ando@g-nextleaders.net

[新体制、2014年本会議に関するお問い合わせ]

2014事務局長 渡丸慶 tomaru@g-nextleaders.net

以上

最終改訂日 2013年10月5日